

Machine and Sovereignty: For a Planetary Thinking

By Yuk Hui*, Minneapolis: University of Minnesota Press, 2024

山下 範久[†]

本書は、香港出身で、ベルナール・スティグレールのもとで学位をとり、欧亜をまたぐ遍歴を経て、現在はエラスムス大学ロッテルダム哲学教授、同大学エラスムス哲学技術研究所の所長を務める哲学者ユク・ホイが、*Recursivity and Contingency*（『再帰性と偶然性』原島大輔訳、青土社、2019=2022年）、*Art and Cosmotechnics*（『芸術と宇宙技芸』伊勢康平訳、春秋社、2021=2024年）に続く三部作の完結篇として、著者の技術哲学を政治哲学に展開した作品「政治 - 技術論考（*Tractatus Politico-Technologicus*）」である。

ユク・ホイの哲学の主題を一言で述べるならば、技術多様性であろう。現代において一般に技術は、特に近代以降西洋において発展した科学と不可分であり、その西洋起源の科学の普遍性に根差して中立的な道具であるとみなされがちである。技術多様性はこれを批判する概念であり、とりわけユク・ホイは技術の多数性の背後にコスモロジーの次元があることを強調する。彼による *cosmotechnics*（宇宙技芸）という造語の所以である。

近年、技術に対する哲学的関心は高い。その背景には、一方に「人新世」のような言葉に象徴される、技術発展の帰結として地球環境に及ぼされるインパクトが人類の生存基盤自体を変容させつつあることへの関心があり、他方に「シンギュラリティ」のような言葉に象徴される、デジタル技術の発展が人間そのもののあり方を変容させつつあることへの関心がある。もちろん西洋哲学には、プラトンやアリストテレスにまで遡って技術を主題とする系譜があり、技術に関する関心は突然現れたものではない。だがユク・ホイは特にデジタル技術の時代としての現代的関心に促されつつ、ひとつには（ハイデガーの洞察に拠りつつ）サイバネティクスの視点から、いまひとつには非西欧の——特に彼自身の出自にも根差して中国および東アジアの——視点から、そうした系譜を書き換えようとしている。

評者は歴史社会学と国際関係論の境界領域に専門を置いており、もとより哲学史本来の文脈に本書における著者ユクの企てを十全に位置付ける力量を持たない。しかし、いま現実の国際関係において、環境危機がきわめて大きいイシューとなっているばかりか、「惑星政治」のような新たな概念が提起されて国際関係の捉え方自体が変わりつつあり、またドローンやAIのような技術が戦争のあり方を直接的に変え、デジタル技術がリベラル・デモクラシーの前提を掘り崩す危険を指摘する声が日々高まっていることに照らせば、そしてそれらが絡みあって地政学的状況に緊張を高めていることをふま

* エラスムス大学ロッテルダム哲学教授

† 立命館大学デザイン・アート学部教授
norihisa@ir.ritsumei.ac.jp

えるならば、現代的文脈をふまえて技術を哲学的に問い直す著者の「政治-技術論考」は、むしろ現実の国際関係を直接に論じるディシプリンにおいてこそ喫緊に読まれるべきである。ゆえに以下、本評は主として国際関係論に対する存在論的批判として本書を受け止め、その理論的示唆について論じる。

本書は八つの章から構成されている。作品全体の主題について論じた序章と、後に述べる「認識論的外交」という暫定的結論について論じた終章の第7章を除いた（第1章から第6章までの）六つの章が本論であり、その前半の三つの章は「国家」概念を基礎づけたヘーゲルを軸に、後半の三つの章は「グロースラウム（広域）」概念を提起したカール・シュミットを軸に、それぞれ論じられている。国際関係論は国民国家と植民地帝国の相克を背景として20世紀の初頭に成立した学問である。そして今日なお私たちは本質的に国民国家と帝国以外に——もうすこし正確に言えば、前者が後者を克服する歴史と前者の限界において後者が回帰する歴史が対抗する歴史記述の内部でしか——国際関係を構成する単位（≡政治形態）のイメージを持ち合わせていない。つまり「国家」と「グロースラウム」を哲学的に論じることは、国際関係を構成する基本的な政治形態の哲学的な基礎づけを根底的に考え直すことに直結している。

だが当然のことながら、本書は19世紀の「国家」から20世紀の「グロースラウム」、そして第三の政治形態へとといったような単純な発展段階を論じようとするものではない。むしろヘーゲルによって哲学的に完成された「国家」概念は、ヨーロッパ国際政治の文脈を超えて国際関係が拡大するほど限界を露呈させながら、今日においてなお国際関係の基本的な政治形態であり続けている。そしてその限界を超えるために提起された概念である「グロースラウム」の概念は、オルタナティブな政治形態の生成のための理論的萌芽を含みつつ、現実には「国家」の概念に回収されてきた。本書はその理路を丁寧に追跡することで、「国家」とは異なる政治形態を思考可能にすることを目指している。

本書の基本的なアプローチは『再帰性と偶然性』において詳細に検討された機械論と有機体論の対抗関係の構図を引き継いでいる。

著者は、まずヘーゲルの「国家」概念が、再帰性として捉えられた理性の論理的表現であることを示す。そのうえでヘーゲルの示す「国家」概念を、機械論と有機体論の対抗関係のなかで分析する。すなわち一方で、「メガマシン」（ルイス・マンフォード『機械の神話』）としての国家は、理性の再帰性を介してその作動と機構を自己発展させるという点で、単なる機械ではないし、他方で国家の統一性は共通の文化のような有機的基体根に根差すのではなく、理性の普遍性に由来するという点で、単なる有機体でもない。それは有機的なフィードバックのメカニズムをそなえた機械、すなわち有機的機械なのである。

この構図において、機械としての国家は、国家による上からの統治の契機を表現するものであり、有機体としての国家は、下からの自己決定としての自由の契機を表現するものである。有機的なフィードバックによって二つの契機を統合した有機的機械としての国家の概念は、再帰性を本質とする理性の論理的帰結として根拠づけられる政治形態である。著者が強調するこの国家概念の論理性——したがって普遍化可能性——は、政治形態としての国家の概念が、そのヨーロッパ中心主義性にもかかわらず、容易にその系の外部に出られるものではないことを示唆している。

だが、ひとたび人間の理性の本質を再帰性に求め、そのうえで有機的なフィードバックをそなえたシステムとして国家というメガマシンを捉えるという視角に立てば、逆にそうしたメガマシンとして

の再帰的なフィードバックシステムが人間だけから構成されていなければならない理由はなくなる。本書前半の第3章「知性的反省性から惑星的反省性へ」では、ジョージ・スク＝レーゲンのエントロピー経済学から、(ハイエクを論じつつ)有機的機械の一般理論としてのサイバネティクスを経て、ティヤール・ド・シャルダンのヌースフィア論(ジオスフィア、バイオスフィアに次ぐ地球の第三の発達層である精神圏)に至る検討を経て、いわば有機的機械としての国家の脱人間中心主義化＝惑星化の道筋を論じている。しかし前半部の暫定的結論では、そうした惑星的な有機的機械の想像力は、現状では人間の終焉へと短絡され、政治を技術に解消する議論——トランスヒューマニズムや加速主義がその典型である——に陥ることから逃れる理路を見出しきれていないと診断されている。

では政治形態としての国家を切断する契機はいかに見出しうるのか。本書の後半では、カール・シュミットがヘーゲルの国家をいかに乗り越えようとしたかという点から議論が始まる。先に述べたようにヘーゲルの国家は、理性の再帰性に根拠づけられているが、再帰性が起動する条件は(人間の)理性に還元しつつくされるわけではない。むしろ歴史のなかで、その条件の具体的な編成は人間と人間以外のモノとを巻き込み、展開する場をシフトさせて、不連続に変容する。そこには、メガマシンが有機的機械として立ち上がる瞬間に介在する一種の生氣論的な力が作用する契機がある。ここに著者は、例外状態において決断する力としての主権というシュミットの議論を読み直す文脈を同定する。

ここで生氣論に触れたが、この後半の議論の舞台の主演がシュミットだとすれば、助演はベルクソンである。著者は、たしかにシュミットの決断主義を政治的生氣論として解釈しているが、それは国家を神秘化する意図からではない。むしろ著者は主権を、それなしには体系が成り立たないが、体系の内部で根拠づけることのできない一種の境界概念だと捉え、それを脱構築することで、主権概念を政治神学から政治的認識論の次元に移行させようとしている。シュミットの空間への関心もそのなかで読み替えられる。海にヘゲモニーが宿ったヘーゲルの時代から、空に重心が移ることによる政治形態のシフトを展望したシュミット、さらにそのシュミットも見通すことができなかったサイバースペースへの重心のシフトがもたらす政治形態の変容の可能性を著者は論じる。そして、そうした空間秩序の均衡構造の更新の背後には当然、技術環境のシステム的な変化がある。彼が「デジタルな大地のノモス」を語るのは、今日において「国家」を切断する政治形態を考えることは、デジタル技術とそれによって開かれた空間の具体的な地質や地勢をふまえてなされなければならないからである。

もう一点、「国家」を切断するうえで重要な論点は、ヘーゲル的な国家が普遍的な理性に根拠づけられているために本質的にモナド的な単一性を帯びているのに対して、シュミット的な政治形態——「グロースラウム」であれなんであれ——は、具体的な場と技術によって異なるかたちの政治形態が立ち上げられうることを前提としている点で本質的に多数的であることである。もちろん多数的であることが直ちに良い政治形態であることを保証するわけでは全くない。事実、歴史のなかの「グロースラウム」は帝国主義的角逐と破壊に帰結した。ゆえに後半の末尾にあたる第6章では、そもそも「戦争」とは何かが技術哲学的に問い返される。ここで著者は、第一次世界大戦の原因を機械論的科学の発展に見るベルクソンの洞察から論を進める。ベルクソンは『道德と宗教の二源泉』(1932)において、機械技術の発達が急激な器官の発達を引き起こし、非有機的器官として巨大化した国家が、他の有機的器官との均衡を失って暴走したことが戦争という帰結を招いたと論じた。

これをふまえつつ著者は、機械と有機体の単純な対立から、サイバネティクスによって問題は深まっていることを指摘する。ヘーゲル的(有機的機械としての)国家におけるサイバネティクスは、彼の時代にあってはまだ観念でしかなく、実際のフィードバックメカニズムは人間が担っていたわけであ

るが、今日においてそれはデジタルな有機的機械そのものによって担われつつある。敷衍^{ふえん}すれば、現代はプラットフォーム化した有機的機械に人間も含めてすべてが呑み込まれ、埋め込まれて不断に組織・化（organ-ize）される状況にある。このように全面化したサイバネティクスは、国家の機能自体を技術的なシステムに完全に適合させる圧力を生ぜしめる一方で、サイバネティクスの本質が偶発事（機械を想定外におく状況）を取り込むシステムの自己生成にあるがゆえに、いわば例外状況の常態化を引き起こして不断に主権的決断を行う圧力を生ぜしめる。つまり今日では、戦争に至る国家の暴走は、単なる機械と有機体の断絶による不均衡ではなく、こうした有機的機械自体の二つの傾向のあいだの振動の激しさから生じる器官学的破綻であることが示唆される。

このような器官学的破綻の根は、突き詰めて言えば、現代のデジタル技術がビッグデータからシミュレーションされた未来に現在を溶解させる——『再帰性と偶然性』ではスティグレールの議論の延長上に「第三次予持」の概念によって提示された——ようなかたちで世界を収束させ、世界から生成の契機を奪うところにある。ゆえに著者は、技術のローカリティに注目することを促す。すなわち技術を、普遍化可能に見える単一の合理性の追求においてではなく、場所ごとに技術性（テクニシティ）のなかで合理性を持つものとして捉えるということである。そのように見れば、メガマシンの国家を切断するものは、「グロースラウム」や近年の新しい「グレートゲーム」のなかで妄想される巨大な勢力圏構想のような、より大きな国家ではなく、自治的な政治形態の多様性であることが示唆される。またその時、技術は単に民主主義のための道具となるというだけではなく、むしろ技術自体が民主化されることが決定的に重要となる。スティグレールの弟子である著者にとって技術はまず記憶の外部化としてあり、ゆえに技術多様性は文化の多様性（精神多様性）に直結している。そして技術という界面において人間とモノ、社会と自然が共・生産される関係にある以上、それは生物多様性とも絡み合っている。技術多様性は、ローカリティから惑星的思考へ向かう多様性のマトリックスの要の位置にある。言いかえれば技術多様性とは多様性を創り出す多様性なのである。

終章で著者は、この技術的多様性の考え方の上に立って、認識論的外交という考え方を打ち出す。多様性を創り出す多様性として、ローカリティに根差す技術多様性が尊重されるためには、異質なものの間の交換が保障されていなければならない。この交換の洞察自体は、カントの永久平和論において交易がその制度的保障とされた論理と共通する。ただ、著者自身が論じているように、現代において貿易はすでに他の手段による戦争であり、異質なもののあいだの交換の契機をほとんど失っている。それに対して著者は認識論の次元で、つまり異なる宇宙技芸のあいだでのコミュニケーションが、ポスト国家の政治形態に器官学的均衡を与えるカギになると示唆している。

その時、ここで用いられている「外交」という言葉の含意には留意せねばならない。この外交は、互いに均質な主権国家間で在外公館を設置し、大使を交換しあうような、いわゆる外交官外交のイメージで捉えられるべきではない。むしろ異なる政治形態のあいだで、境界を横断するさまざまなエージェンシーとアドホックに協働することで秩序を調達し、変化に対応するような実践こそが、ここでの外交の本質だと思われる。その外交が認識論の次元で展開するならば、その担い手はまず知的生産に携わるもののコミュニティだと考えられるが、実効的であるためには、技術多様性およびそれと相互に作用する精神多様性や生物多様性を高める実際の取り組みに、それぞれのローカリティにおいて携わる者の間の交換が促されなければならない。それを通じて、「国家」に閉じ込められてきた政治的思考が新たなかたちで個体化される契機が現れると、著者は論じているように思われる。

国際関係論は、「国家」を公理とする体系の認識論的正当性をめぐる批判に取りつかれた学問である。その学史は、さまざまな非国家主体を体系に取り入れ、ポストコロニアリズムやフェミニズムのインパクトを吸収しつつ、国際関係の構成要素のカテゴリーの輪を拡大する過程という側面を持つ。その過程の現局面には、いわゆる「関係論的転回」(relational turn)に総称されるように、人間主体と非人間主体との共-生成に焦点を当てて存在論の次元からディシプリンを再構築しようとするオルタナティブな流れがあり、たとえば環境問題と先住民の権利を同時に論ずる惑星政治の視点や、開発原病としての感染症という観点からのグローバル・ヘルス論などの研究の蓄積は進んでいる。他方、そうした批判的アプローチは、一方でさまざまなアイデンティティに対する文化的多様性の包摂、他方でさまざまな種に対する生物的多様性の包摂を、それぞれのフロントで拡大することを論じつつも、そこに介在する技術的多様性に焦点を当てるものは少ない。それは単に注目すべき多様性の種類の問題ではなく、多様性の動的な生成——「多様性を創り出す多様性」——への理論的関心の問題である。認識論的外交はポスト国家の政治形態を射程に入れるものである以上、その関心は国際関係論において公理の解体を意味しうるものであり、いわゆるプラットフォームを近代の政治形態の正統性から逸脱した「テクノ領主」(ヤニス・ヴァルファキス『テクノ封建制』)だと見ることもあながち極論ではない現実を見れば、本書はまさに、今日の技術環境の変化が国際関係自体を存在論的に変容させているということを、国際関係論という学知そのものに突き付ける理論的示唆を持っている。